

2022年06月14日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【今週は、FOMCと日銀の金融政策決定会合】

直近の値動きでは、ドル/円が135円台を付けて、2002年の最高値を更新した。

このことが、大きく話題になり、ニュース等でも大きく報道されている。

特に、直近の「ドル高円安」に関しては、「悪い円安」といった、そのデメリットを強調した論調が多い。

「ロシア・ウクライナ戦争」に起因して、エネルギー価格が上昇している上に、エネルギーを輸入せざるを得ない日本は、この円安で、さらに輸入コストが大きくなるのが、必然であるからだ。

ただし、従来のいわゆる「円高の時期」に、

『その円高メリットを積極的に享受しようと努力したのか?』

私個人としては、それを問いたい。

日本の場合、一般論としては、為替相場が大きく変動した際に、大騒ぎをするのだが、変動が収まると、何事もなかったかのように、静かになる。

その為替変動そのものへの対応や、為替レートが変動した後への対応に関しては、多くの時間を割いていないように感じる。

++++
++++

さて、そういった状況下で、今週は、今日明日(2022年6月14日、15日)に、FOMC(米国の金融政策を決定する会合)がある。

そして、その翌日、翌々日の6月16日、17日に、日銀の金融政策決定会合が予定されている。

++++
++++

先月(2022年5月3日、4日)のFOMC(米連邦公開市場委員会)では、米ドルの政策金利を0.50%引き上げる、と決定した。

これは、事前の予想通りであった、と考えます。

この利上げで、FF金利（フェドファンド金利、米政策金利）の誘導目標レンジは、「0.75－1.00%」となった。

そして、この会合（2022年5月3日、4日）で、FRBの保有する資産縮小を6月に開始する、と発表した。

さらに、パウエル議長は、次の2会合（＝2回のFOMC）で、それぞれ0.50%の利上げを示唆した。

一方で、0.75%の利上げには、積極的ではない、と発言した。

+++++

だから、明日（2022年6月15日）に発表される米国の政策金利は、0.50%に引き上げになる、と考えるのが必然だ。

+++++
+++++

日銀の政策決定会合でも、従来のスタンスを変更することは、考え難い。

黒田日銀総裁は、『その感覚が、庶民的ではない』と批判されて、発言の撤回謝罪に追い込まれたが、金融政策そのものに関しては、従来のスタンスを維持する姿勢を見せている。

つまり、2022年6月16日、17日に開催される日銀の金融政策決定会合では、大規模な金融緩和政策は、維持される可能性が高い、と考えるのが必然だ。

+++++
+++++

（2022年06月14日東京時間13：25記述）